日本医史学雑誌第三十六巻第二号
平成二年四月三十日発行

医史学と私

大滝紀雄

医家に生まれ育った私は、小学校、中学校の頃から父を通じて、多数の先生方に接する機会があった。三宅秀、三浦謹之助、三宅鉱一、二木謙三、稲田竜吉、西野忠次郎、佐々廉平、眞鍋嘉一郎、井上誠夫、坂本恒雄、茂木蔵之助、小田俊郎、高木喜寛、高木逸磨、岩井誠四郎、矢追秀武、三沢敬義、中泉行正、助川喜四郎ら、その名を挙げればきりがない。そういう医師たちがどんな偉人であったのか、また医学界にどんな貢献をした人たちであったのかは、私のまったく関知しないことであった。ただ人の良さそうなおじいさんであったり、気難しそうな小父さんであったという印象が残っている。

昭和十七年私は慈恵医大を卒業、海軍軍医として南方に赴き、終戦後の昭和二十三年から二十九年まで、横浜市立大学医学部内科に勤務した。外科に石原明さんが勤務していたが、私は当時はあまり医学史に興味をもっていなかったので、両人の間はたんに内科、外科の医局員としてのお付き合いにすぎなかった。

昭和二十九年、私は横浜の現地で内科を開業してから、多少の時間的余裕ができた。当時私は二つのことに興味を感じていた。その第一は、私の父大滝潤家が四〇年以上も勤務していた順天堂の歴史がどうであったかということであった。第二は、祖父佐藤尚中が長崎でポンペに就いて医学を学んだという事実は知っていたが、ポンペとはどういう人物であっ

たのか、また彼はどんな教材を使って学生を教育したかを知りたいと思っていた。

昭和三十八年五月二十一日順天堂創立一二五周年に当たり、上野の東京文化会館で記念式典が行われた。小川鼎三先生はその前年東大を停年退官され、順天堂大学で医史学の教授となり、日本医史学会本部を順天堂に移された。当日の先生の記念講演は「順天堂の歴史」であった。私はかねてから御高名を聞いていたものの、はじめて先生の肉声に接し、順天堂史の真髄に触れる思いがした。

その後順天堂大学の佐藤要教授から、順天堂史を編纂するから、君にも助力を頼むといわれた。昭和四十年十月御茶の水の山の上ホテルで順天堂史編纂の打ち合わせ会が行われた。小川先生を中心に、佐藤要、大野大、石塚司農夫、篠丸頼彦、林欣二、松本銈太、それに私が当日の会合に出席したように思う。『順天堂史・上巻』はその後もしばしば会合を重ね、推敲に推敲を重ねた一五年後にりっぱに完成したのは、皆様の記憶に新たなところであろう。

私の第二の目標である、尚中が長崎でどのような医学教育を受けたかを知るためにはどうしたらよいかと考えた。私は五人兄弟の四男であったが、医師を志した次兄が高校時代不慮の事故で死亡し、結局私一人が父の業を継ぐことになった。私の家は関東大震災の火災で全焼し、太平洋戦争のごたごたもあり、めぼしい蔵書をほとんど失ってしまった。富士川游『日本医学史』、清宮秀堅『新撰年表』など二〇冊位が残っていただけだった。

私はやむをえず、本郷や神田の古書店を訪ね、藤井尚久『医事文化年表』、古賀十二郎『西洋医術伝来史』、『長崎洋学史』、平凡社東洋文庫『長崎伝習所の日々』、『江戸参府紀行』、長与専斎『松香私志』、鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』、日本医史学会編『明治前日本医学史』、『中野操日本医事大年表』等を求めてつとめて読んだ。

マンスフェルト講義集

昭和四十二年のある日のことであった。父から譲り受けた蔵書中に、生理学と解剖学の写本があったことをふと思い出

した。すっかり忘れ去っていたが、押入れの奥を探してみると、古新聞に包まれたままのマンスフェルトの八冊の写本が、ナフタリンの香も抜けていたが、無事取り出された。約二〇年ぶりに日の目を見ることになった。食糧事情の悪かった終戦直後には何の感動もなかったこの写本が、この時はまことに貴重な宝物のように見えた。

「和蘭第二等醫員　満斯歇兒(マンスヘルト)篤師　口授」の写本は解剖学三冊、生理学四冊、内科学一冊が残っている。歇兒篤は歇兒斯、歇爾堀などの当て字も書かれているが、Constant George van MANSVELT (1832—1912)、在日期間 慶応二年（一八六六）から明治十二年（一八七九）までにまちがいないと思う。

写本はいずれも和紙、和綴、毛筆縦書き、縦約二四センチ、横約一一・五センチメートル。図は原則として上欄外に画かれ、一部が文中にある。例外として生理学第八号には卵の分裂、着床、妊娠子宮図等四図が末尾四頁に大きく画かれている。一部朱を用いたものもある。

講義集は次の八冊から成っている。

㈠『解剖新説』二　二〇葉「関節及び靱帯篇」詠帰斎森本氏蔵

明治四辛未十月一日より十四日全業

関節と靱帯が詳述されている。

㈡『解剖新説』五　五三葉「脈管学篇」詠帰斎森本氏蔵

明治六歳癸酉　大陽第四月初二

最初の四頁に、心臓・上行大動脈、普通喉動脈、鎖骨下動脈、下行大動脈が朱入りで図示されている。内容は心臓、心嚢、動脈、静脈、門脈、水脈（淋巴管）、胸管等が詳述されている。

㈢『解剖新説』九　五一葉「内臓篇」

明治六癸酉大陽二月念三日

五管器、肺、気管、食道、胃、腸（薄腸、厚腸）、肝、胆、脾、膵、副腎、泌尿器、生殖器が記されている。

(四)『生理学』乾　一一八葉

壬申七月より十一月

「生理学トハ何ゾヤ。病理ヲ究識スルノ源学ナリ。故ニ医タル者ハ必ズコノ学ヲ知ラザル可カラズ……」に始まっているこの生理篇は次の三部から成っている。第一部は無機、有機化学から血球、血液循環。呼吸、分泌、膵液なども記される。第二部は消化、吸収、新陳代謝、体温、筋運動、眼の生理、脊髄、延髄、痙攣、睡眠、夢等、第三部は種族保存、遺伝、生殖器、交合、妊娠、胎児発育、分娩等が記される。

(五)『生理学』第六号　三八葉「眼科篇」

解剖組織図入りできわめて詳しい。

(六)『生理学』第八号　六四葉

明治十年丁丑三月十三日卒業

生殖器、交合、妊娠篇である。

(七)『人身窮理書（生理）』二号　二五葉

吸収機（消化吸収）、血運機（血液循環）、心臓、毛細管循環、静脈循環、門脈循環、腎臓循環、脳循環

(八)『病理学　内科各論二』二三葉「血行器病篇」詠帰斎森本氏蔵

明治八乙亥歳八月三日筆畢

病理学とは現在の内科学のことで、心拡張、心炎、弁膜疾患、心臓神経症、心嚢炎、大動脈瘤、動脈破裂等が記載されている。

百年も前のコピーもない時代に、長時間をかけて筆写し、しかもその内容は現在の医学的水準の高さと比較しても、か

なり納得のゆく程度であったのを見て、私はただただ驚かない訳にはいかなかった。

私が求めていたものは、尚中がポンペにどんな医学を学んだかであったが、マンスフェルトの講義集を最初に見ることになってしまった。マンスフェルトはポンペの後任ボードインのあとを受けて、慶応二年（一八六六）から長崎へ、明治四年には熊本へ、九年からは京都へ、十年から大阪へ、そして十二年三月には帰国している。これらの講義集が、長崎でのものであったか、熊本でのものであったかわからないが、ポンペより一〇年位後のものであったと考えられる。

しかしいずれにしても、私が医史学という学問に異常な興味をもち始めたのは、この不完全なマンスフェルトの写本八冊によってであったのは間違いない。

ところでもう一つ気になる点がある。それはこの写本の何ヵ所かに詠帰斎森本氏蔵などの書き込みのあることである。父から譲られた品の中に詠帰斎薬籠がある。私の頭には幼い頃何度かお会いしたことのある森本千之助の名が浮かんできた。私の手元にいまから一八年前の昭和四十六年、当時の神奈川県三浦市医師会長森本一善氏宛ての私の質問に答えていただいた、同氏からの封書の返事がある。それによると一善氏の祖父森本儀太郎は平戸藩士で平戸で漢学塾を開いていたが、明治五年佐世保市の小学校長になった。儀太郎の弟の森本千之助は医者であり、明治初年四谷区坂町五で開業した。詠帰斎という号をもっていたかどうかは定かでないが、漢学の素養もありおそらく同一人ではなかろうかという内容である。一善氏は現在書道を趣味とし九十歳以上で健在とのことである。

もう一人私の友人に慶応医学部出身で横浜市緑区十日市場で開業している内藤盛徳氏がいるが、彼の兄も医師、父は内藤堯宝（ギョウホウ）、母はのぶ、そののぶの父親が森本千之助であるとのことである。マンスフェルト講義集には森本蔵などと書かれているが、森本千之助自身が筆写したのではないかとも思われる。後考を待ちたい。

日本医史学会

このようなことが奇縁となり、私は横浜市大の石原明先生に種々の医史学上の相談をもちかけた。先生は当時はすでに外科医でもなく、生理学者でもなく、市大で医史学講座をもち、医史学関係蔵書は研究室にところ狭しと置かれていた。また昭和四十一年五月第六七回日本医史学会が横浜で行われたとき、会長の重責を務めた。神奈川の医学史に関して平安・鎌倉時代と近代の二つの特別講演を一人でされた。石原さんは私に、一人でこつこつ勉強するよりも、医史学会へ入会し、皆さんからの刺激を受けたほうがいいといって、入会の推薦をして下さった。それと同時に著書の『医史学概説』をいただいた。

医史学会例会には、小川鼎三、緒方富雄、大鳥蘭三郎の三長老がほとんど毎回出席されていた。それらの三先生に薫陶を受けたこと、学問熱心な会員方の発表に耳を傾けたことはたいへん勉強になった。

蘭学資料研究会にも入会し、一九六九年、ライデン大学、ハーグを中心とした「日蘭交渉史に関するシンポジウム」に参加できたことは無上の喜びであった。ポンペの発表を異国で行ったこと、スハウテン博士と二人で昼食をともにしながらポンペを語ったこと、阿知波五郎先生と一緒にアムステルダムの国立美術館や、クレラー・ミューラー美術館を訪れたこと、大鳥先生とロンドンの二階バスの階上へ乗ったこと、石原先生と二人でセント・トーマス病院を訪ねたこと等がつい昨日の出来事のように甦ってくる。

毎年日本各地で開催される日本医史学会総会には、私も特別の用事がない限り、なるべく出席するように努力している。総会は通常二日間で、その前夜に理事・評議員会が開かれるが、毎回地方色豊かなものである。

昭和五十八年、第八四回日本医史学会が横浜で開催された。石原先生はすでに故人となり、彼が会長を務めてから一七

年ぶりのことであった。小川理事長から私に会長をするようにとの話があった。私は一開業医にすぎないし、横浜には医史学会の先輩もおられるし、大学教授もおられるので、最初は固辞したが、結局お引き受けすることにした。

横浜だけでなく、神奈川県下の会員が、この総会のため非常な協力をして下さったことは、私の終生忘れられないことである。横浜の学会はまずまずの成功であったと思う。また小川先生はその後健康を損われ、最後に出席された総会であったことが、いまでも私の印象に強く残っている。

医史学会会員である特典は多数あるが、日本中の医史学研究者と友人になれることである。つい先日も岡田靖雄先生から絵葉書収集家であり、それによって医史学を研究しておられる造船技術者の遠山嘉雄氏を紹介していただいた。同氏はもと駒込病院長宮本叔先生の五女の御主人であり、私の父がヨーロッパ外遊中、叔先生に送った絵葉書数葉を所持しておられる。そのコピーを送っていただいたが、父の外遊日記である「音づれ」を、別の視点から眺めることができ、たいへん有難いことであった。

医史学に興味をもっていると旅行が非常に楽しくなる。海外旅行ももちろんだが、国内旅行でもいわゆる名所古蹟の歴訪だけでなく、思いがけない収穫に出合うことがしばしばある。私はこの連休を利用して角館を訪ねてみた。平賀源内の紹介により杉田玄白を知り、『解体新書』の図二一葉を画いた小田野直武が秋田藩角館の出身で、同地の松庵寺に墓所もあることは知っていた。また「上野不忍池」や「少女愛犬図」など、わが国西洋画のはしりとしても有名である。かねてから出身地でさえも彼のことはあまり顕彰されていないのが残念だと聞いていた。

たまたま平成元年の昭和天皇誕生日以来、角館歴史村の青柳家が広く一般に公開されることになった。そしてこの年は不遇の天才画家小田野直武(寛永二年(一七四九)生れ)の生誕二四〇年に当った。まったく何の期待もしないで青柳家の薬医

門を入ってみたら、小田野直武参考館が開設され、彼の胸像除幕式が終ったばかりであった。『解体新書』やテゥルプの「解剖図」の説明がここで見られようとは夢にも思っていないことだった。残念ながら団体旅行で、時間的余裕がなく見学が表面的に終ったことは後ろ髪を引かれる思いであった。

「医史学と私」という題で何か書くようにといわれたので、思い出のままを書き連ねてみた。間口の広い、内容の深い、しかも味わいの尽きない医史学の研究は私の終生の仕事にふさわしいと思うので、今後も一生続けていきたいと思う。

（横浜市西区）